

2020年6月28日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エレミヤ書1章4～8節
ルカによる福音書9章1～6節
「十二人の派遣」

<十二人>

今日のところは、イエスさまが十二人の使徒を、神の国を宣べ伝えるため、神の恵みのご支配が始まったという良い知らせを告げ知らせるために遣わされた、という場面です。

イエスさまには、弟子がたくさんおられました。9章1節には「イエスは十二人を呼び集め」とあります。十二人というのは、少し遡って6章12～16節で語られていた人々です。そこには「そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた。」とありました。

「使徒」というのは、「遣わされる者」という意味です。イエスさまは、神の国、神の救いを人々に告げ知らせるために遣わそうと、夜通し祈られて、この十二人を選ばれたのです。

十二人が選ばれた出来事は、今申しましたように6章に書かれていました。そこからやっとならば9章になって、十二人が遣わされる時が来たのです。

イエスさまはそれまで、この十二人を連れて伝道の旅をなさり、御言葉を語り、癒しの御業を行なってこられました。8章1節には「すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。」とあります。選ばれた十二人は、イエスさまのお側に置かれ、語られる御言葉を聞き、神の力によって行われる多くの御業を目撃してきたのです。

これは、この時に遣わされるための訓練の時、備えの時であったと言うことが出来ます。そしていよいよ、イエスさまは十二人を「使徒」の名の通り、遣わされたのです。

<目的と権能>

さて、その際に、イエスさまは十二人に「あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす権能と力をお授けになった」とあります。

悪霊に打ち勝つこと。それはまさに8章で、ゲラサ地方まで出向き、イエスさまがレギオンと名乗った悪霊を追い出された出来事がありました。そして、病気をいやすこと。先週、先々週に、わたしたちは十二年も出血が止まらない女が、イエスさまの服の房に触れるだけでいやされた出来事と、死んでしまった十二歳の娘をイエスさまが生き返らせる、そのような出来事があったことを聞きました。

これは、神の力、神の権能によってしか出来ないことです。この神の力と権能を、イエスさまは十二人にお授けになったのです。

でも、十二人がこの力と権能を授けられたのは、遣わされて、あちこちの病人をいやすことを目的とするためではありません。

遣わされる目的は、9章2節に書かれているとおおり、「神の国を宣べ伝える」ことです。神の国とは、神のご支配のことです。神さまが預言されたご計画によって、罪と死の支配に捕らえられている人間を救い出して下さる。その実現のために、神の御子イエスさまが来られた。この救い主イエスさまが、これからなされる御業によって、罪と死に打ち勝ち、神さまの恵みのご支配を始めて下さる。いや、イエスさまが来られた今や、もうその恵みのご支配がここで始まっている。この恵みを受け入れ、信じなさい。神と共に生きる者となりなさい。それが、イエスさまが語って来られた「神の国」であり、十二人に宣べ伝えさせようとしておられることなのです。

ですから、悪霊を追い出すことや、病のいやし自体は目的ではなく、この神の国の実現、神さまのご支配がまことに始まっていることを示すために、行われているのです。

<何も持たずに>

さて、そうして十二人は、イエスさまから力と権能を授けられ、いよいよ各地へ遣わされます。でもイエスさまは、さらにこのような注意事項を言われました。

3節「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。」

実は、この十二人の派遣は、マタイによる福音書にも、マルコによる福音書にも語られています。例えばマルコには「旅には杖一本のほか何も持たず」と、杖一本は持つことを許可しています。しかし、ルカ福音書は、それもいけない。杖も袋もパンも金もだめだ、と語るのです。

このイエスさまの教えは、神の国を告げる者、伝道者は、貧しくなければいけないとか、必ず行く先々で必要なものは備えられるから、持って行かなくても大丈夫だよ、ということをお教えているわけではありません。

なぜなら、ルカによる福音書の22章35節以下でこのように書かれているところもあるからです。「それから、イエスは使徒たちに言われた。『財布も袋も履物も持たせずにあなたがたを遣わしたとき、何か不足したものがあつたか。』彼らが、『いいえ、何もありませんでした』と言うと、イエスは言われた。『しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい。…』」

イエスさまは、時と場合によっては、十分備えをして行きなさい、と言われたのです。

では、この十二人が初めて遣わされるこの場面で、イエスさまがすべての持ち物の所持を禁じられたことは、いったいどういう意味があるのでしょうか。

ここでイエスさまが教えておられるのは、自分の持っているものに一切頼ってはいけない、ということです。この「神の国を宣べ伝える」という務めを果たす旅にあたって、自分の所有するものをういようとするのを、全面的に禁止しておられるのです。

それは、杖やパンや袋や金だけではありません。自分自身の能力や、知恵や、計画、あらゆるものを指していると言ってよいでしょう。あなたの所有する持ち物や力には一切頼るな。徹底的に神の力のみに頼るのでなければ、この務めを果たすことは出来ない。神の国を宣べ伝えることは出来ない。それが、イエスさまが初めて十二人を遣わすにあたって教えられたことなのです。

宣べ伝えようとしている神の国、神のご支配は、人間の思いや、知恵や、力を遥かに大きく超えているものです。なぜなら、人には出来ないことを、神はなさるからです。神の御子が人となり、人の罪を担われます。罪人は赦されて神の子とされ、滅びるはずだった者には新しい命が与えられ、終わりの日には死者に復活の体が与えられます。

それを、わたしたち人間の知恵や、説明や、能力などで伝えられるはずがありません。神の力と権威によるのでなければ、この力強い神の国を、神さまの御業を、イエスさまの救いの恵みを伝えることは、決して出来ないのです。

しかし、だからこそ、イエスさまがその力と権威を与えて下さいます。必要な力を備えて下さいます。そのイエスさまの力が、遣わされる者に神の国を語らせ、神の御業を成して下さるのです。

イエスさまの力と権威を携えて行くということは、まさにその力の源である神の御子イエスさまが、遣わされた者と共にいて下さるということです。この方に徹底的に頼るのです。この方の力に信頼し、この方の権威によって語るのです。

そのとき、遣わされた者を通して、イエスさまご自身が働き、イエスさまご自身が語って下さいます。そうして伝道が行われるところに、神のご支配が実現していくのです。

<迎え入れるかどうか>

そして、イエスさまは、何も持たずに行くことを告げられた後、このように言われました。「どこかの家に入ったら、そこにとどまって、その家から旅立ちなさい。だれもあなたがたを迎え入れないなら、その町を出ていくとき、彼らへの証しとして足についた埃を払い落とさなさい。」

「どこかの家に入ったら」というのは、単に宿を取らせてくれる人がいる、ということではありません。家に入れてくれる、というのには、語られた神の国を信じ、御言葉を受け入れ、共にイエスさまのために働く人が与えられる、ということです。町や村の中で一人でも、御言葉を信じて受け入れる人がいれば、そこを拠点として、伝道の業を進めていくことが出来ます。イエスさまの十字架、復活、昇天の後の使徒たちは、まさにそのようにして各地で救いの知らせを告げ、福音を世界へ宣べ伝えていったのです。

また、「どこかの家に入ったら、そこにとどまって、その家から旅立ちなさい」というのは、たとえば最初にお世話になった家より、もっと良いおもてなしをするから来て下さい、などと言われても、自分の居心地の良さを求めて転々としてはいけない、ということです。

この場合も、人が与えてくれるもので自分を満ちし、より良い物を求めたり、人に頼ろうとすることになっていきます。そうして、神にのみ依り頼み、神にのみ求めて生きる歩みから離れていってしまうからです。

また一方、町や村で「だれもあなたがたを迎え入れない」ということも起こると、イエスさまは語られます。これは、先ほどと同じように、単に泊めてくれない、という意味ではありません。神の国を受け入れない、救いの知らせを信じない、ということです。神さまが、ご自分の救いの恵みへと招いて下さっているのに、その招きを聞いておきながら、拒否するという。神さまを拒む、ということです。

その時には「彼らへの証しとして足についた埃を払い落としなさい」と言われます。このジェスチャーは、異国の地を旅して帰ってきた時に、異教の汚れを聖地エルサレムへ持ち込まないための、ユダヤ人たちの習慣です。これは、関係を完全に断ち切ることを象徴しています。これを、神の国を受け入れなかった人に対してしなさい、というのです。神さまとの交わりを拒んだ者は、神の国と無関係な者になる、ということを示すのです。

神の国の知らせを聞くことは、ただ教義を聞くとか、教えを学ぶ、ということではありません。神さまがご自分の許に招いておられるということです。ご自分との関わりを求めておられるということです。

この招きを聞いた人は、それに応えるか、応えないか。神のご支配を受け入れるか、受け入れないかの、どちらかしかないのです。神のご支配を信じて、その恵みの中に生きる者となるか。自分は神を必要としないと行って受け入れず、神さまとの交わりを拒むか。神の御言葉が語られるところには、それに対する人の応答が生じます。使徒たちは、神の国を告げたなら、そこでこれらの人々の反応に直面するのです。

一方でこれは、語った使徒たちからすれば、このことは、自分の語りの上手さや、自分の力量によって、相手を信じる者に変えたり、説得したり出来るものではない、ということです。イエスさまに遣わされた者は、神の力によって、イエスさまの權威によって、誠実に、心を尽くして、全力で語ることしか出来ません。信じる者が興されるのは、決して自分の手柄ではありませんし、また拒否されても、その人の命に対して自分が責任を負えるわけではありません。しかし、イエスさまは、選ばれた者を用いて神の国を告げさせ、救いの御業をなさるのです。

一人の人が罪の中から救われる、という出来事が起こるのは、そこに生きて働いて下さる、神の御業でしかありません。ですから、神の国を宣べ伝えることは、神の御業であり、神の力であり、神にのみ依り頼むべきことなのです。

そうして6節には、「十二人は出かけていき、村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした」とあります。彼らはイエスさまに遣わされ、イエス

さまに授けられた力と権威によって、与えられた使命を果たしたのです。

<わたしたちも遣わされている>

さて、今日の聖書箇所は、十二人の使徒たちはこんな風に伝道したんだなあ、ということ語り伝えるだけのものではありません。わたしたちもまた使徒と同じように、イエスさまに選ばれ、力を与えられ、遣わされているからです。この十二人の派遣は、わたしたちの派遣のことなのです。

今わたしたちが集っているこの群れ、教会は、使徒の信仰を受け継いで、使徒が語った福音によって召された者たちの群れです。ですからこの群れもまた、選ばれた者たちの群れであり、使徒の信仰を、神の国を新たに宣べ伝えていく使命を与えられているのです。

わたしたちは、この選ばれた十二人の使徒は特別な存在で、わたしは選ばれてなんかいない。自分の信仰のことだけで精一杯で、十二人のように、神の国を伝えるような立派な役割は果たせない。そんな風に感じるかも知れません。

しかし、それは神さまの選びを誤解しています。神さまは、立派で真面目で頼れる人間を選ばれるわけではありません。神さまの選びは、神さまのまったく自由なご意志によります。

その証拠に、と言っては何ですが、十二人の中にはイエスさまを後に裏切ってしまうユダもいました。弟子の筆頭のペトロは、この後、イエスさまが十字架に架かれる時には、「知らない」と言って、神の御子との関わりを否定しました。他の弟子たちも皆、逃げ去ってしまいました。

わたしたちの心意気とか、強さとか、立派さとか、そのようなものは頼りになりませんし、選ばれる基準でもなんでもありません。ただ、神さまが「あなただ」と言って選ばれるのです。十二人も、イエスさまが夜通し祈られて、選ばれた者たちでした。

そしてイエスさまは、選ばれたこの十二人の、わたしたちの、罪も、弱さも、愚かさも、すべてをご自分が担って下さるのです。イエスさまの十字架の贖いの許に、イエスさまがすべてを引き受けて下さって、わたしたちを選び、招いて下さっているのです。そして、今ここで礼拝をささげていることが、この選びにあずかっているという動かぬ証拠です。

わたしたちはイエスさまに選ばれ、イエスさまに自分の何もかもすべてを担って頂いた者です。おんぶに抱っこもいいところです。それなのに、自分のあれやこれやの持ち物を手放さないのは、邪魔になるだけなのです。ただこの方に頼らなければならないのです。この方に、担われ、赦され、与えられ、生かされているのです。

そして、この方が言われるのです。何も持たず、ただわたしの力と権能によって、神の国を宣べ伝えなさい。

それは、道端で出会った誰にも彼にも、十字架と復活のことを語らなければならない、と

ということではありません。方法は、それぞれです。語れる時にはイエスさまが語らせて下さいます。語れない時には、沈黙して執り成しの祈りをささげます。

わたしたちと共にイエスさまがいて、働いて下さるのですから、どこでも、わたしたちが遣わされるところには、神の国が伴います。家庭でも、職場でも、学校でも、地域でも。わたしたちは自分の知恵や、計画や、能力によらず、イエスさまが与えて下さる力によって、遣わされたところで、神の国を告げるのです。神の国を求めて忍耐強く祈るのです。

人が御言葉を聞き、イエスさまと出会い、救われるのは、神さまの御業です。この教会は、その神の力によって興された新しい神の民の群れです。この喜びの群れに、一人でも多くの者が加えられるために、イエスさまはわたしたち一人一人を選び、力を授け、日々、この礼拝から、与えられた場所に遣わして下さるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの救いのご計画に、わたしたちを置いて下さり、ただ恵みによって選び、神の国を告げて下さり、イエスさまの福音を信じる者として下さったことを感謝いたします。

今、わたしたちもまた、あなたの恵みのご支配を告げる者とされています。

人の力や知恵や計画によるのではなく、ただイエスさまが授けて下さる力と権能によって、この小さな群れが、神の国を宣べ伝えていくことが出来ますように。この群れに連なる一人一人が、イエスさまと共に会って、イエスさまの力によって、日々遣わされている場所で、神の国を証しし、また祈り続けることが出来ますように。

そして、福音が世に響き渡り、この地にあなたの御国が来ますように、切に祈り求めます。このお祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン